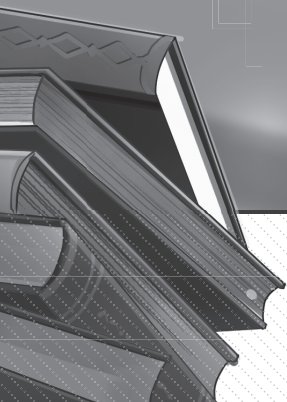


# ちびっこ 錬金術師の 恩返し

るあか *ruaka*

ill. 81無理無理芸人



紹介登場人物

ジル

『鍊成堂グランキャット』を  
営む錬金術師。  
不器用ながらも愛情を込めて  
ノエルを育てている。

くろすけ

謎の黒猫。  
ノエルを一人前の錬金術師に  
するべく、奮闘中！

ノエル

本作の主人公。  
病で命を落とした少年が  
幼児に転生し、今の姿に。  
幼くても錬金の才能はピカイチ！

ジャック

『黒豹』のメンバー。  
粗野な言葉遣いに反して、  
根は優しい。

リオン

冒険者パーティ『黒豹』の  
槍使い。かつては  
王国の聖騎士団の  
騎士を務めていた。

アイラ

『黒豹』の紅一点。  
豪快な性格で、姉御肌。

エミリア

道具屋を経営  
している女性。  
だが、何やら秘密を抱えて  
いそうな様子……？

パーシヴァル

聖騎士団の団長。  
普段は真面目だが、  
妹のエミリアのことになると  
暴走しがち。

## 1話 鍊成堂グランキャット

カラン、コロソ。

お店の扉とびらの開く音。

リオンが来たんだ。

僕は目の前にいる黒猫くろねこを撫なでるのをやめて、お店の入り口まで出迎でむかえにいった。

「リオン、おはよー！」

「おはよう、ノエル。いつもお出迎えありがとな。で、パパは？ いつものところか？」

リオンはそう言つて、僕の目の前に中身がパンパンに詰あふまっている麻袋あたまぐらうを下サツと置いた。

彼はリオン・ブラックウエル。僕のお父さんの仕事仲間である冒険者で、二十歳過ぎの頼れるお兄さんだ。

「うん、パパまたかくれんぼしてる。十時になったら僕がおーぷんにするから大丈夫だよ！」

僕はニツと笑う。

「ノエルは本当にお利口りこうさんだなー。三歳にしてはめちゃくちゃキハキしゃべるし、賢かしこいよな」  
僕の頭をヨシヨシと撫でるリオン。

僕は「えへへ、僕、すごいもんね♪」と誤魔化<sup>ごまか</sup>しつつ、内心ドキッとしていた。

あれ、三歳くらいになったらもうペラペラしゃべってもいいと思っていたけど、まだダメなのかな。赤ちゃんって、難しい。

リオンがカウンターの上から裏側をガバツと覗き込んだので、僕も一緒になってカウンターの横からひよこつと覗き込む。

すると、カウンターの下で膝を抱えているお父さんと視線が合った。

「……俺、今日こそここで一日をやり過ごしてみせる」

謎の決意を固めてそう宣言するお父さん。

僕は思わず「ふっ」と噴き出した。

「そう言ってやり過ごせたことないだろ、ジル？」

リオンはもうこのやり取りには慣れっこだといわんばかりの顔で、お父さんにそう言った。

「お前が店の看板を『OPEN』にしていっくらだろ……」

「俺じゃねえし。ノエルが毎日ひっくり返してんだもんない？」

僕は「なー」と相槌<sup>あいづち</sup>を打ってキャツキャと笑った。

「うちの子のせいにすんな。ノエルを巻き込むな」

僕、OPENにしたがらないお父さんに代わって自分から看板をひっくり返しに行ってるんだけど。そういう意味では、お父さんが悪いような気がするよ……？

「分かったから、今日の分の素材、こん中入れていくからな」

リオンはお父さんの文句を軽く流すと、目の前にあった木箱の中で麻袋<sup>あたまふく</sup>を逆さまにして振った。信じられないくらいたくさんの薬草や木の蔓<sup>つる</sup>が、麻袋の中から木箱の中へと落ちていく。

木箱もまた、絶対に入り切らない大きさなのに、ブラックホールのように素材を吸い込んでいった。吸い込まれた素材は木箱の隅<sup>すみ</sup>の方でキュツと縮こまっている。

「まじーあつしゅくってすごいね」

「な。魔導圧縮、すげえ技術だよ」

「魔導」という仕組みはよく分からないけれど、リオンの持っていた麻袋もこの木箱も物を圧縮することができる。人体には反応しないから、驚きだ。

リオンは返事のないお父さんを気にもとめないで、お店の隅に置いてあった別の木箱をヒョイツと持ち上げる。

「これ、今日の納品用のアイテムだろ？ 持ってつとくからな」

「……頼むー」

カウンターの裏からお父さんが小さく返事をした。

「じゃあな、ノエル。俺もう行くから。さっきも言ったけど、時計の短い針<sup>はり</sup>が十になったら、入り口のあれ、ひっくり返すんだぞ？」

「うん、十時でおーぷんだよね。僕、分かるよ♪」



「ヨシヨシ、本当にノエルは賢くていい子だな。じゃあ、また明日な」

「リオン、ばいばーい！」

全身で手を振ってリオンを見送ると、僕は黒猫のくろすけと一緒に時計の前で座って待機した。暇つぶしにくろすけを撫で撫でする。

「くろすけ、いい子いい子」

「ごろにゃ」

十時になったら、この『鍊成堂グランキャット』がオープンする。なんのお店かというと、ズバリ鍊金術のお店。

お父さんの仕事は主に三つ。

一つ、隣の道具屋へ回復薬やらのアイテムを“納品”。

二つ、お店に鍊金の材料を持ってきたお客さんの“鍊金代行”。

三つ、お店に来たお客さんの武器や防具に注文されたバフ効果を“鍊成”。

この納品、鍊金代行、鍊成がお父さんの鍊金術師としての仕事内容だ。

お父さんは一度お店を閉めようとしたらしいけど、僕を養うためにお店を続ける決心をした。した。

ちよつとやる気なさげに見えるしあんま楽しそうじゃないけど、なんだかんだ毎日ちゃんとノルマはこなしている。

「んにゃ！」

くろすけが時間が来たことを知らせてくれた。

「十時だ！」

僕は立ち上がってくろすけと一緒にお店の外に行き、『CLOSE』の看板をひっくり返して『OPEN』にする。

ここはラインツ王国の国境の町ブライア。すぐ隣の大国、ザイラル王国に近いこともあり、たくさんの冒険者が訪れる賑やかな町だ。

グランキャットは道具屋と並んでその大通りに立っているため、毎日多くのお客さんが来る。今日もすでに数人の冒険者がお店が開くのを並んで待っていた。

「ノエル君おはよう」

「おはよ、いらつしやいませ！」

「今日もパパのお手伝い？ 偉いねー」

「うん！ 僕、お手伝いできるからね♪」

僕はドヤ顔でそう答えた。

そんなこんなで平和な町ブライアの鍊成堂グランキャット、今日も開店です。

## 2話　そして、親子に

——ある日の夜。

僕は前世の夢を見ていた。

目を開けるといつも目に入る真っ白な天井。そして横を向けば、同じく真っ白なベッド。

僕の視界には一日の時間の大半、この真っ白な風景が映っていた。

僕は幼い頃から病弱で、病院への入退院を繰り返していた。

小学校にもあまり通うことができず、病院に来てくれる家庭教師の先生と勉強をした。

十歳を過ぎた頃には一時退院することができず、ずっとこの病院の個室で過ごしていた。

僕の両親は共に会社の経営者で、お金持ち。

だから僕は最先端の治療が受けられて、綺麗で立派な個室のある病院に入れてもらっていた。

——だけど、両親はほとんどお見舞いには来てくれなかった。

僕のことなんてもう忘れてしまったのだろうか。むしろ、僕という息子なんて最初からいなかったことにしているんじゃないかとすら思える。

僕の病気は、最先端の治療が受けられたところで、生き延びられるだけという深刻な物。

最先端の治療なんて受けられなくてもいい。立派な個室じゃなくても、大部屋だって別に良かった。

——そんなことより僕は、ただお見舞いに来てほしかった。

お見舞いに来て「大丈夫？」って言ってほしかった。「頑張ろうね」って、言ってほしかった。

そのうちベッドからも起き上がることができなくなつて、看護師さんの貸してくれたファンタジー小説を読み漁る毎日だった。

こんなふうに魔法が使えたら良かったのに。僕の病気なんて回復魔法でチャチャッと治せたら良かったのに。

そうしたら僕もこの物語の主人公みたいなのにのびのびと暮らせたんだろうか。

そんな僕の願望が叶うはずもなく、僕は十五歳でこの世を去った。もちろん、最期の時にすら、僕の両親は病室にはいなかった。

◇

僕は死んだはずだった。僕の人生はそれで終わりだと思っていた。

しかし、気付いたらザイラル王国という国の貴族街に住む伯爵家の子として生を享けていた。これってもしかして、小説で読んだ異世界転生!?　まさか、僕には貴族の息子としてのスローラ

イフが!?

初めはそう思ってた。ワクワクしていた。

——だけど、今回も愛されなかった。

「おい、魔力鑑定の結果が出たぞ。このガキは……私の子ではない」

僕が生後半年の頃。僕の父親であるはずの伯爵がそう宣言したことがきっかけで、なぜか僕だけが王都のダウンタウンへと捨てられることになった。

辺りが静まり返った深夜。フタの開いた木箱に入れられてゴミ溜めに捨てられる。

どうしよう、どうすればいいんだろう。

生後半年で、一人ではどうすることもできない。

僕は、ひとまず赤ちゃんの仕事でもある『泣く』ことから始めた。

「おぎゃあ、おぎゃあっ!」

お願い、誰か気付いて……!

そんな僕に気付いて、僕を木箱の中からすくい上げてくれたのが、ジル・グランヴィルだった。

「よし、よし、どうしたお前、こんなところで泣いて……かわいそうに、捨てられたんだな……」

そう言うジルは、とてもやつれた表情をしていた。

この人、どうしてこんなに悲しい顔をしているのだろう。

もしかしたら、この人もこのまま死んでしまうのではないだろうか。

そう思うと、僕の心がキュッと締め付けられた。

「あう、あう……」

僕は彼を励まそうと、彼の顔へ小さな手を伸ばす。

赤ちゃんの手って、こんなに短いんだ。大丈夫だよって、頭を撫でてあげたいのに、全然届かない。

「うん? どうした? 俺の顔に何かついてるか?」

「あう……あう……」

全然言葉が出てこない。元気出してって、そう伝えたいのに「あう」はないわあ。だから僕は代わりに、「きやつきやつ」と今できるとびきりの笑顔を彼に向けた。

「あはは、さっきまで泣いていたのに、もう笑ってやがる……」

彼も僕に釣られてか、やつれた顔で静かに微笑んだ。

「あい、あいっ♪」

もっと笑ってほしい。そう思って僕ももっと笑った。

なぜ、僕はこんなに必死になっているのだろう。この人に助けてほしいから? もちろん、それを否定はしない。



だけど、一番の理由は……この人が僕に似ていると思ったからだ。心にぽっかりと穴が開いたかのような、そんな喪失感<sup>そうしつかん</sup>が伝わってきて、共感してしまった。

「ははっ、お前、可愛いな……」

先程までどこかぎこちない表情だった彼は力が抜けたかのようにふっと笑い、僕のほつぺをツンツンと突いた。ちよつとくすぐりたい。

彼は僕を抱き抱えたままその場を去り、ダウンタウンから王都の外の街道へと出た。

月明かりに照らされて、彼はトボトボと歩いていく。一体どこへ向かっているのだろうか。街道の途中にあった休憩所<sup>きゅうけいじょ</sup>にたどり着くと、彼は僕を抱えたままベンチによいしょと腰掛けた。彼は、夜空を見上げていた。僕はそんな彼をじーっと見上げる。

夜空を見上げたまま、彼はポツンとこう呟いた。

「俺……もう、こんな人生終わりでいいんじゃないかって、そう思ってた」

「あう……」

「俺の人生が始まったダウンタウンで終わろうと思ってさ、そしたら、なんの因果<sup>いんが</sup>か、そこにお前がいた」

「あい」

「なんだろうな、お前はそんなつもりないかもしれないけど、『大丈夫だよ』『元気出して』って、



そう言ってくれてるような気がしてさ」

「あー、あい♪」

伝わってた！ 僕の気持ち、この人にちゃんと伝わってた！

「だから俺さ、お前のために、もう一度頑張ってみようかと思う。鍊金術……絶賛スランプ中なんだが、中級くらいまでならなんとかできるし、やつぱり店、続けようかな」

鍊金術？ この人、鍊金術師なんだ、かつこいい。それに、お前のためにつて……？

「あい、あい♪」

僕は、ひとまず前を向いてくれたつばい彼に笑顔を送った。そんな彼もまた、僕を見下ろして笑顔を返す。

「おお、ご機嫌だなあ。よし、決まりだ。俺、お前のために頑張るよ。今日から俺が、お前の“お父さん”だ」

「っ！ あい、あい！」

再び空を見上げた彼に釣られて僕も天を仰ぐ。

空には、満天の星が輝いていた。

僕はその後ノエルと名付けられ、正式にジルの養子となった。

——ここで僕は、夢から目覚めた。

◇

朝。

「うーん……」

僕はお父さんの布団からズリズリと這い出る。

なんだか懐かしい夢を見たなあ。あれからもう二年半か。

お父さんは僕を拾って以来、目一杯の愛情を僕に注いでくれている。

——僕は、初めて親の愛情を知った。

血の繋がりなんて関係ない。初めてもらった本物の愛情。いつか僕は、お父さんに返したい。そう思いつつ、今日も僕はお父さんの被っている布団を思いつ切り捲った。

「パパー！ 朝だよ！」

「んおつ、さ、寒っ!? お、ノエル、お前がやっただんな？」

お父さんはそう言っただけで起き上がると、変な形の耳栓をきゅぽつと外す。

「パパが起きないからだよね！」

僕はきゅぽつと笑う。

「起こしてくれてありがとなー、おはようノエル。パパ、今日も頑張ってカウンターに隠れるから

な！」

お父さんはそう言って僕を抱き上げて、部屋のカーテンを開けた。それによって目覚めたくろすけは早速日の当たる窓際に陣取ると、うーっと伸びをしてごろんと寝転がった。

### 3話 僕の将来の夢

——十八時、グランキャット閉店。

僕はくろすけと一緒にお店の外へと出ると、『OPEN』の看板を『CLOSE』へとひっくり返した。

「よし、これでおっけー！ くろすけ、お家戻るよ！」

「にやあ！」

僕の呼びかけに返事をして素直に店内へと戻るくろすけ。僕が言うのもなんだけど、くろすけって、めちゃくちゃ賢い猫だと思う。

くろすけは、僕がお父さんに連れられてこのお店にやってきた時からここに住んでいる。

僕が生後半年の頃からずっとそばで見守っていてくれて、体中を撫で回しても絶対に怒らない。

とつてもお利口さんだ。

僕は一歳半頃からトイレトレーニングを始めて、急いでおまるに駆け込むなんてこともあった。けれど、そういう時だってまるで状況を完全に理解しているかのように、「ぎにゃー！」って鳴いて一緒についてきてくれるんだ。

この建物は一階がお店になっていて、二階が僕たちの居住スペースになっている。

僕は一階のお店に戻ると、カウンターの奥にある『鍊金部屋』の戸を開けようとした。

「んー……！ やっぱ、開かない……」

引き戸になっているのだけれど、びくともしない。そりゃそうだ、今はお父さんが明日の納品のための鍊金中で、鍊金をかけているから。

「ぐるにやあ？」

くろすけも危ないよと言わんばかりに、前足の肉球をぼむつと僕の腕へ押し付けてきた。

「うーん……見たいなあ、パパが鍊金しているところ……」

僕はそう呟いてその場にペタンと座り込んだ。くろすけも「ぐるにや」と短く鳴いて、僕にくっついて伏せをする。

普段は鍵がかかっている入れないけれど、鍊金部屋には一回だけ入ったことがある。

作業台の上に筒状の寸胴鍋が三つ並んでいて、部屋の奥の低い台座の上には不思議な魔法陣が描かれているんだ。

まるで、妖しい魔女の研究室のような、子ども心をくすぐる部屋だった。

錬金術ってどうやってやるんだろう……。

「僕にも錬金、できるかなあ？」

「にゃ♪」

くろすけがスリスリと擦り寄ってくる。

できるよって、言ってくれてるのかな？

「あのね、僕ね、大きくなったらパパみたいに錬金術師になって、このお店でパパと一緒に働きたいんだ」

僕は猫に向かって一体何を話しているんだろう。だけど、なぜくろすけなら僕の話を理解してくれているんじゃないかって、そう思ってた。

「ごろにゃ♪」

「ずっと前にパパが言っていたんだけど、パパ、スランプなんだって。上手に錬金できないってことだよな」

「にゃあ……」

「だからね、僕も一緒に錬金して、パパを助けてあげたいんだ。そうしたら、パパは毎日カウンターに隠れなくても良くなるかも」

「にゃ」

それが、僕の夢。それが、僕のお父さんへの恩返し。

くろすけと一緒に錬金部屋の前でしゃがんで待っていると、引き戸がガラガラと開く。

「お、ノエル、くろすけ、待っててくれたのか。腹減ったよな、ごめんな」

「のーひんするやつ、できた？」

お父さんは「できたぞ」と言っ僕を抱っこしてくれる。

「僕、お腹。ぺこぺこ！」

「にゃあ！」

「ははは、だよなあ。パパもぺこぺこだ。よし、二階に上がって飯にするか。まずはくろすけの力かり、用意してやんねえと」

お父さんはスツキリした表情で階段を上がっていった。いつもそう、仕事が終わると、お父さんはいつも晴れ晴れとした顔になる。

二階に上がって早速、僕はしゅばつと手を挙げる。

「僕がくろすけに力かりあげたい！」

「お、サンキュー、ノエル。その引き出しに……」

「ここでしょ？ 僕、分かるよ」

僕はキッチン引き出しからキャットフードを取り出した。

「ははは。すごいな、ノエルは。なら、頼むぞ。量は適当でいいからな」

「うん！」

僕はくろすけ用のお皿を出して、キャットフードをザツと注ぐ。

そして、キツチンの入り口で礼儀正しくお座りをしているくろすけの前にお皿をコトンと置いた。

「はい、くろすけ、ご飯ですよー」

「にゃあ！」

ガツガツと食べ始めるくろすけ。

「くろすけ、カリカリおいしー？」

「にゃあ♪」

そんな僕たちの後ろでは、お父さんがパスタを茹でながらチャチャツとオムレツを作ってくれていた。

「いただきまーす！ パパ、おいしー！」

卵の形はちよつと崩れているし、ケチャップで描かれたくろすけはとても猫とは思えない謎の生命体に見える。だけど、お父さんのオムレツ、味はとっても美味しいんだ。

お父さんは料理があんまりできなかったけれど、僕のために必死に練習してくれていたのを、僕は知っている。

「はは、良かった。ノエルはオムレツ好きだな」

「うん、大好き！」

お父さんと僕は顔を見合わせると、ニツと笑い合った。

ご飯を食べたら家族みなでお風呂に入って、一緒のベッドに潜り込む。

早く、僕も錬金術ができるようになりたいなあ。そんなことを考えながらウトウトする。

## 4話 騎士と道具屋？

朝の開店前、今日もカラン、コロンと呼び鈴を鳴らしてリオンが素材を届けに来る。

「リオン、おはよ！」

「おはよう、ノエル。パパはかくれんぼかな？」

「うん、かくれんぼ！」

二人であつはつはと笑う。

すると、再び呼び鈴がカラン、コロンと鳴って、隣の道具屋のエミリアが入ってきた。

「すみませーん。おはようございます！」

エミリアは美人のお姉さん。なんだか今日は美味しそうな匂いがする……。あの腕にかけているバスケットが怪しい……。



「あーっ、エミリア！ おはようー！」

「エミリア様、おはようございます！」

軽く「よっ」と挨拶する僕とは打って変わって、急に襟を正すりオン。

「まあ、ノエル君おはよう。もう、リオン。様はやめてって何度も言っているでしょう？」

そう言ってふくーっ頬を膨らませるエミリア。それでも美人のままなんて、不思議だ。

「す、すみません、つい癖で……」

「ねえ、リオン、なんでエミリアは様なの？」

僕がそう尋ねると、リオンではなくエミリアが「ふふふ、なんでもないのよ。それよりパパはいる？」と割って入ってきた。

彼女のその言葉を聞いて、カウンターからひよこっ顔を出すお父さん。

「すみません、エミリアさん。ここです……」

「まあ、ジルさん、好きですね、そこ♪」

ふふふっ可笑しそうに笑うエミリア。

お父さん、ちよっと恥ずかしいやつ……。

「実はミートパイを作ったのですが、作り過ぎてしまつて……良かったらお昼にでもどうですか？」  
エミリアはそう言つてバスケットのフタを開けた。

「あーっ、美味しそう！ ミートパイ、僕、大好きだよ！」

エミリアが僕にも見えるようにバスケットを低い位置で持ってくれているため、僕は覗き込んで「わーい！」と喜んだ。

「ああ、ありがとうございます、エミリアさん。ぜひいただきますね」

ペコリとお辞儀をしてバスケットを受け取るパパ。

あれ、そういえばエミリアに話をはぐらかされた気がする。

リオンは確か、元ライントツ王国の聖騎士団の騎士様だったんだ。でも今はやめて、このブライアの町を拠点に冒険者をやっている。

お父さん曰く、槍の扱いがすごく上手なんだって。

そんなリオンにあんな態度を取られていることは、エミリアは？

「ねえ、ねえ、エミリア。エミリアはおじ、ふーまなの？」

「まあ、ノエル君、難しい言葉を知っているのね？ ふふふ、私はただの道具屋よ」

「こら、ノエル。あんまりエミリアさんを困らせるな」

と、お父さん。

「はーい……」

「ああ、いいんです、怒らないであげてください。ノエル君、リオンが変なことを言つたのは、誰にも言っちゃダメよ？」

エミリアはそう言つて口元に人差し指を当てた。

「うん。僕、誰にも言わないよ?」

変なことつてきつと、『エミリア様』って呼んだことだ。

何か訳ありのお嬢様? でも、お嬢様が町で普通に道具屋をやっているなんて、そんなことある訳ないよね。気にしたつてしようがないか。

「ありがとう、ノエル君。えつと、これが今日の納品分ですね?」

「ああ、俺が持つて行きますよ、エミリアさ……ん」

リオンは素材用の木箱に麻袋の素材をザーツと流し込むと、慌てて納品用の木箱を持ち上げた。その後、エミリアは納品用の木箱を抱えたりオンと共に隣の道具屋へと帰っていった。

昼過ぎ。二階のダイニングでエミリアのくれたミートパイをいただいた。

「美味しかった〜! ごちそうさま!」

お父さんはひと足先に食べ終わつて一階でお仕事をしているので、空になったバスケットがポツンと残る。

よし、僕がエミリアに返しに行こう!

僕はバスケットを持つて一階へと駆け降りた。くろすけも慌ててついてくる。

一階では、お父さんがお客さんの接客をしていた。

「回復薬十個ですね。では、薬草を十個と鍊金代の500Cをお願いします」

クレドというのは、この世界の通貨のことだ。

「はいよ、これで頼むよ」

お客さんはそう言つてカウンターの上に薬草十枚と100クレドコインを五つ置いた。ガタイが良く腰に剣を携えている、優しそうなおじさんだ。

「はい、確かに。では、すぐに鍊金して参りますのでそちらでかけてお待ちください」

「はいよー」

お客さんはお父さんに言われた通りに窓際のベンチに腰掛けた。

そんなタイミングで、お父さんが僕に気付く。

「……つと、ノエルどうした? ごめんな、パパ今、忙しくてな……」

「あのね、全部食べたから、これ、エミリアに返してくる!」

僕はそう言つてバスケットを高く掲げた。

「おお、マジか。助かるよ。隣だから大丈夫だとは思うけど、気をつけて行ってくるんだぞ?」

「うん、大丈夫だよ!」

「坊や、おつかいか。偉いなあ」

「うん、僕えらいもんね♪」

お客さんの言葉にそう言つてニツと笑うと、僕はグランキャットを飛び出した。

「にゃあ!」

くろすけも一緒になって飛び出してくる。外にまでついてきてくれるんだ。よいしょ、よいしょと入り口の扉を押して道具屋の中へと入る。力がないから扉が開くのがゆっくり過ぎて、呼び鈴もゆっくりカラン……コロン……と鳴った。

「まあ、ノエル君！ くろすけまで！」

エミリアは僕に気付くと、すぐにカウンタから出てきてくれた。

「エミリアー！ ミートパイ、美味しかった！ これ、ありがと！」

エミリアに空のバスケットを差し出す。

「ありがと、ノエル君。まあ、ちよつと食べにくかったかしらね？ 大事な洋服にパイ生地が  
たくさん溢れているわ」

エミリアはそう言つて、僕の服を優しくサツサツと払ってくれた。

「うわあ、ほんとだ。エミリア、ありがと！」

僕は恥ずかしくてえへ……とはにかなだ。

「ふふ、どういたしまして。さあ、ノエル君、くろすけ、ちよつとお客さんも誰も来ていないし、一緒にパパのところへ帰りましょう」

そう言つて自然に僕の手を取るエミリア。

あれ、なんか……お母さんと手を繋いでいるみたい。エミリアからは、そんな温かさを感じる。前世では、こんなふうにお母さんに手を繋いでもらった記憶がない。

「うん……」

慣れていないからか、少し緊張する。それでも僕は、エミリアの細い指をギュッと握り返して、くろすけと共に無事グランキャットへと送り届けてもらうのであった。

## 5話 あねごはだ 姉御肌な冒険者

——ある日の昼下がり、鍊成堂グランキャットにて。

お客さんが落ち着いてきたため、お父さんはカウンターに肘を突いてボケーっとしている。僕は店内の片隅でくろすけをブラッシングしてあげていた。

「くろすけ、いい子、いい子」

「ごろにゃあ〜」

僕のブラシの力加減がちょうどいいのか、くろすけは気持ち良さそうにゴロンゴロンと寝返りを打っていた。

カラン、コロン。

「いらつしゃ……なんだ、アイラか」

お客さんが来たかと思い一瞬反応するお父さんだったが、入ってきた人物を見るなり気怠げな

口調に変わった。

「ちょ、アタシ、客として来たんだけど!」

赤髪<sup>あかがみ</sup>のポニーテールの映える、引き締まった筋肉の女性。彼女はアイラ・ツユシロ。リオンと共にお父さんのお店の素材集めを引き受けてくれている冒険者だ。

大きな斧<sup>おの</sup>を背負っているから、きっと相当力持ちだろう。

お父さんの素材集めを手伝ってくれている人はもう一人いて、三人合わせて『黒豹<sup>くろひょう</sup>』という名前の冒険者パーティを組んでいる。

「アイラ! いらっしゃい!」

お父さんの代わりに僕がそう笑顔で迎えると、アイラは元気よくニツと笑顔を返してくれた。

「ノエル! アンタはパパと違って優しいね」

「はいはい。で、鍊金代行か? 鍊成か?」

やる気なさそうにそう尋ねるお父さん。

ちよつと、もつと丁寧に接客して!?

アイラはそんなお父さんの態度なんて気にもとめないで、革<sup>かわ</sup>のグローブをカウンターのの上に置いた。

「これに防御の鍊成<sup>ほごせい</sup>を施しておくれよ」

「了解。承<sup>うけと</sup>りました」

お父さんはアイラの革のグローブを持って、鍊金部屋へと消えていった。

「さあて、なんか代行してもらおうかねえ……」

アイラはそう呟いて、カウンターに置いてあった鍊金代行用のアイテムの素材リストを手にとった。

「あつ、アイラ! それ、僕も見たい!」

「ん? いいよ、こっちで一緒に見ようか」

アイラがお客さん用のベンチに腰掛けて、僕に隣に座るよう促<sup>うなが</sup>す。

「うん、アイラ、ありがとう!」

「にゃ」

僕がベンチに座るとくろすけも僕の膝に乗ってきたので、みんなで一緒に素材リストを眺<sup>なが</sup>めた。どれどれ……回復薬を作ってもらうためには薬草と50Cか。そういえばこの前冒険者のおじさんが十個一気に頼んでいたな。

僕がマジマジと見つめていると、アイラは「ああ、そうだ、ごめんごめん」と何かを思い出したように、こう続けた。

「この一番上のアイテムは回復薬って言って、薬草とお金をパパに渡すと作ってくれるんだよ」

あつ、僕が字を読めないと思って……アイラは面倒<sup>めんどう</sup>見がいいなあ。

「僕、回復薬、知ってるよ! なんて飲み物なのに、やくそーだけでできるの?」



「そっか、回復薬はいつも見てるもんね。実は飲み薬の錬金には綺麗な水と空きビンが必ずいるから、ここには書いていないだけなんだ。だから、薬草だけじゃなくてお水も必要なんだよ」

薬草と水と空きビンで、回復薬ができるんだ……！ 面白そう……！！

「いいなあ、僕、回復薬作ってみたいなあ……」

思わず漏れ出す本音。アイラはそれを聞き逃さなかった。

「なんだい、ノエルも錬金術師になりたいのかい？」

「あつ、うん……パパには秘密だよ？」

「なんで秘密なのさ？」

「えー、恥ずかしいから！」

僕はそう言って笑って誤魔化す。くろすけには錬金術師になりたい理由をサラツと言えたけど、人に言うのはなんだか恥ずかしい。

「あつはっは、そうかい、そうかい。それなら、錬金鍋はまだ難しいだろうし、パパも危ないからって使わせてくれないかもだから……これ、アタシと一緒に採りに行ってみるかい？」

アイラはそう言って素材リストの『薬草』を指し示した。

「えっ、やくそーを!？」

心が躍る。

薬草を採りに行くな……冒険だ！

「ノエルのパパはさ、アタシらみたいな冒険者を雇っているから自分では素材の採取には行かないけど、採取から自分でやる錬金術師もいるんだよ。冒険者をしながら錬金術師として生活しているやつだね」

「えーっ！ 楽しそう！ 僕、行きたい！」

「よーし、アタシに任せな！」

アイラは、お父さんが錬成を終えてカウンターに戻ってくると「ノエルが暇そうだから近所の簡単な素材集めに連れてってあげる」と上手く説明してくれた。

お父さんは少し心配しつつも「今はなんでも興味を持つ時期だからな。それなら、頼むよ」と了承してくれた。

僕はうわあーい、と飛び跳ねて喜んだ。

近所の森は弱い魔物しかいないけど、一応念のためもう一人の黒豹のメンバーであるジャックも誘うことに。

お父さんも「ジャックもいるなら安心かもな」とのこと。ちなみにリオンは王都に帰っていて今日は不在だ。

それでもくろすけも僕からピタリ離れることなくついてきた。

こうして僕とアイラとくろすけは冒険に出掛けるのであった。

## 6話 魔物より魔物

「ぼうけん、ぼうけん、初めての冒険♪」

「にゃあ♪」

僕はルンルンで町の大通りを歩く。

町の外に出るなんて、生後半年の頃にお父さんに拾われてザイラール王国からこのブライアの町まで来た時以來だ。しかもあの時はずっとお父さんに抱っこされたままだった。

でも、今は違う。自分で歩いて町の外の森に行つて、薬草を採取するんだ♪

ひとまず僕のもう一人の用心棒を確保するために町の酒場『黒猫亭』へと入る。

「さかばー！ くらすけも入つていいの？」

「ああ、いいいいいよ。ペットなら動物でも魔物でもおつけーだよ」

アイラはそう言つて、ズンズンと奥へと入つていった。

広いフロアにたくさんの木製のテーブルセットが置かれており、奥にはマスターのいるカウンター席があった。

なんだか酒場に入っただけで、もう冒険者になった気分だ。

僕とくらすけもアイラに続いて酒場の奥まで走つていき、アイラよりも早く、カウンターに座つてチキンにかぶりついている大男にタッチした。

「ジャックー！」

「んお!? ノエルじゃねえか！ どした、迷子かよ？」

こんがりと日に焼けた褐色の肌に、筋骨隆々の巨体。ジャックの隣に立てかけてある大剣ですら、僕よりもずっと大きい。

「違うよ、ジャック、やくそー採りに行くよ！」

「あ？ 薬草だあ？」

まるでチンピラのような口調で問い返してくるジャック。そんな彼に、アイラが事情を説明してくれた。

「んだよ、ただのお守りに俺を巻き込むじゃねえよ。ったく、しゃーねえなあ……」

ジャックは文句を言いつつも急いでチキンを食べ終えた。しかも僕にも一口くれた。

なんやかんやジャックが仲間に加わってくれた。

僕はマスターにバイバイと手を振つて酒場を後にする。そして、走つて町を出るのであった。

町から大平原へと出て、街道には入らずにすぐ南のカルムの森へと足を踏み入れた。

すると、早速スライムが「キューッ！」と鳴きつつ飛び出してきた。

「あつ、スライムだー！ 可愛い！」

キヤツキヤと喜ぶ僕を背に、ジャックは悪魔の形相で無慈悲に大剣を振るった。

「邪魔だ、雑魚が、いちいち出てくんない！」

「キュー……」

スライムはお目目を『××』にしながら、呆気なく消えてしまった。

「あう……スライム……かわいそ……」

ジャックつて、雰囲気怖いから魔物よりも魔物に見えるんだけど……。良く言えば『ワイルド』、悪く言えば『チンピラ』って感じ。

「あつ、ノエル、スライムゼリーがドロップしたよ。拾ってこん中入れておいで」  
アイラはそう言つて麻袋を僕に渡してくれた。

確かに、スライムがいたところにぶにぶにのアイテムが落ちている。

「うん！」

しゃがんでスライムゼリーをツンツンと突いてみると、プリンのようにプルンツと震えた。  
た、楽しい……！

くろすけも一緒になってベシツと猫パンチをする。

そして、掴んでみるとひんやりと冷たい。溶けてゼリー状になった保冷剤みたいな感じだ。

「わーい！ スライムゼリー、捕まえたー！」

「にゃあー♪」

何に使うのかは知らないけど、嬉しい。僕はスライムゼリーを大事に麻袋へと入れた。

「おら、テメエはこれを探りに来たんだろうが。これが薬草だ」

ジャックは大剣の先で道端に生えている薬草をちょんちょん突く。もう、せつかなんだから。

「うん！ やくそー！」

僕はしゃがんで薬草をブチツともぎ取ると、それも麻袋へ入れた。

要領が分かった僕は、調子に乗つて薬草を集めまくる。すごい、薬草つてそこら中にたくさん生えているんだ。

「アイラとジャックとリオンは、いつもこーやつてパパの素材、集めてるの？」

「そうだねえ。ここは初級の素材しか採れないからあんま来ないけど、森とか洞窟とかで集めることが多いよ。それで、リオンが毎朝アタシらの分もまとめて納品しにしてくれるんだ」

「すごい！ いつも、ありがとー！」

「何がいつもありがとうだ。ガキのくせに偉そうなこと言つてんじゃねえ」

「ええ……」

ジャック……感謝したのになぜ怒つてる？ すると、アイラがジャックのお尻に思いつ切り蹴りを入れた。

「いつてえ！」

「ごめんよ、ノエル。どういたしまして」

アイラは申し訳なさそうに僕に向かって手を合わせた。

「あはは……だいじよぶ……」

「さて、んじや、最後にその湧き水でも汲んで帰るかね。これで、回復薬セットの完成だ」

アイラがそう言って指差した岩はお椀型にえぐれており、水がこんこんと湧き出ていた。

「うん！ 僕がやりたい！」

「はいよ」

アイラに空きビンをもらい、コルク栓をきゅぽつと外して水を汲んだ。

「できたよ！」

「あーあ。ノエル、服びしょびしょになっちゃったね」

うつむくと、服のお腹の辺りの色が変わってしまっていた。

「あう……」

「そうだ、ふふん、いいこと思いついちまったよ」

アイラはそう言って僕の脇を持って抱き上げると、僕をジャックの後頭部へと押しつけた。

「なっ、冷て!?」

「ほら、ジャック、ノエルもう疲れたってさ。肩車してやりなよ」

「ふざけんなよ、クソツ、髪びしょびしょじゃねえか！ ……つたく、しょーがねえなあ。しつかり掴まってるよ」

ジャックは僕の足を掴んで僕が落ちないようにしてくれた。やっぱりジャックは口が悪いだけで、優しい。

「わーい、ジャック、ありがとう！」

僕が嬉しくなってジャックの髪をギュッと握って引つ張ると、彼は「おいこらクソガキ！ 髪引つ張んじゃねえ、禿げたらどうすんだよ！」とブチギレていた。

「あう……ごめん……」

日も暮れる頃。無事に鍊成堂グランキャットへ帰還すると、お父さんが上回復薬を小さな木箱にたくさん入れて待っていた。

「パパー！ ただいまー！」

「おかえりノエル。初めての採取はどうだった？」

お父さんはそう言って僕を抱き上げてくれるが、すぐに「冷てっ!?」と言う。

「あのね、やくそーたくさん採ったし、スライムゼリーもゲットした！」

僕は満面の笑みでそう答える。お父さんは「そうか、良かったなあ」と頭を撫でてくれた。

「アイラ、ジャック、これ、持ってっくれ。ノエルが世話になったな」



そう言つて小さな箱を差し出すお父さん。

「なんだい、アタシが勝手に言い始めたことなんだから、そんな氣遣うんじゃないよ」

「んだてめえ、要らねえのか？　なら、俺が全部もらっていくわ。ありがとよ」

ジャックはお父さんから木箱をひいっと取り上げると、そそくさと出て行つてしまった。

「あつ、こら！　誰も要らないなんて言つてないんだよ！」

プンプンのアイラも、ジャックの後を追うようにお店から出て行つた。

「忙しいやつらだなあ……」

「なあー」

「にやあー」

僕が採取した薬草と湧き水の入ったビンはお父さんにプレゼント。

スライムゼリーは記念に専用の木箱に入れて、寢室に置いた。

それ以来僕は、暇さえあれば用途の分からないスライムゼリーをふにふにして遊ぶようになった。

そんな僕たちに忍び寄る怪しい氣配があることを、この時の僕たちはまだ知らない。

## 7話　納品数が足りない？

ある日の朝。

いつものようにリオンに道具屋納品分の木箱を持って行つてもらおう。

だが、彼はすぐにエミリアを連れて鍊成堂グランキャットへと戻つてきた。

「エミリア、おはようー！　あれ、リオン、また来た？」

「おはよう、ノエル君」

エミリアは優しく微笑む。

「ん？　エミリアさん、おはざつす」

お父さんがカウンターからひよこつと顔を出す。安定のかくれんぼだ。

「ジルさん、おはようございます。すみません、さっき納品していただいたアイテムなのですが、回復薬が、二十個程足りなくて……」

エミリアは申し訳なさそうにそう言つた。

「えっ、二十個!?」

目をぱちくりとさせるお父さん。僕もびつくりだ。納品数が足りないなんて、僕がここに来て以来初めてのことだった。

「俺もエミリアさんと一緒に何度も確認したんだけど、マジで八十個しかなかったんだよね……」  
と、リオン。

なんてこつた。回復薬は毎日百個納品。毎日売り切れるらしいから、百個用意するのはマストな

はずだ。

「すみません、余分に生成していないでしょうか……？」

あくまでも申し訳なさそうなエミリア。怒っている訳じゃないのは明らかだ。

「すみません、いつもびったりの生成で余分はありません。今回もいつも通り百個作ったつもりだったのですが、本当にごめんなさい。不足の二十個分、生成でき次第持っていきます」

お父さんは恐縮きようじやくしながら謝った。

「ああ、こちらこそすみません。ジルさん、開店後はお忙しいでしょうに……」

「いえ、ミスしたのはこちらなので……」

「俺、急いで追加の素材採ってくるわ！」

リオンはそう言ってお店を飛び出して行つた。

「では私もこれで。ご無理なさらない程度で大丈夫ですのど」

と、エミリアもお店を後にした。

「んあー、百個生成したと思つたんだけどなあ。おつかしいな……まさか俺、まだ三十五なのにもうボケが始まって……!? はあ、鍊金するか……」

お父さんはトボトボと鍊金部屋へと入っていった。

「パパ……」

お父さん、大丈夫かな。心配で鍊金部屋を見つめていると、くろすけが「ごろにゃ〜」と鳴いて

擦り寄ってきた。心配するなど言ってくれているようだ。

「くろすけ、いい子、いい子〜」

くろすけの頭を撫で撫ですると、くろすけは目を閉じて幸せそうに僕の手のひらに頭を押し付けてきた。

——何はともあれ閉店後。

お店の合間になんとか追加の納品分と、閉店後に明日の納品分も生成し終えたお父さんは、もうヘトヘトになっていた。

それでも僕やくろすけのお世話をしてくれて、ベッドに入ると耳栓をしてすぐに死んだように眠りについた。

「パパ、いい子、いい子。お疲れ様」

お父さんの頭を撫で撫ですると、僕もお父さんのベッドに潜り込んで一緒に眠った。

『ノエル！ おい、起きんかノエル！ 全く、そろそろ発現してもいい頃じゃろうて。緊急事態じゃ、ノエル！ 起きろこのドチビおたんこナス！』

誰!? 僕の頭の中に直接、雑な悪口を言ってくるのは!?

ガバツと身体を起こすと、真っ暗な視界の中で黄色いお目目が二つキラーンと光っているのを見

つけた。

「くろすけ……？」

『おおっ、ようやく通じたか……！ このタイミングで超能力のスキルが発現したのはデカイ！』

「超能力……？」

なんかくろすけが僕の頭の中に直接意味分かんないことを言ってくる。超能力のスキルが発現？  
何を<sup>ちやうにひやう</sup>厨二病みたいなことを……。

「ぐるにゃ！」

『そうじゃった、今はそんなことは後じゃ！ とにかく一階の店へ急ぐのじゃ！』

一体何が何やら……。ていうかくろすけ、なんで話し方そんなにジジくさいの……？ ちょっと、  
思ってたのと違ったかも。

『何をボサツとしておるのじゃ！ いいから早くついてこんか！』

くろすけはそう言って「シャーッ」と威嚇<sup>いかく</sup>した。

「わ、分かったよ……！」

とにかく緊急事態らしいので、僕は急いでお父さんのお布団からよいしょと這い出た。その時  
に、お父さんの腕をちよつと踏んでしまう。

「あつ、パパ、ごめ……」

「うーん……」

お父さんは唸<sup>うな</sup>って寝返りを打つ。大丈夫、起きなかったみたい。

「くろすけ、待ってー！」

慌ててくろすけの後を追いかけて、慎重<sup>しんちょう</sup>に足踏みしながら階段を降りる。足を滑<sup>すべ</sup>らせたら危ない  
からね。

——時刻は午前二時過ぎ。

僕が一階のお店にたどり着くと、くろすけが一匹の子猿<sup>こざる</sup>にシャーッと威嚇<sup>いかく</sup>をしているところ  
だった。

「えっ、なんで猿!？」

子猿だけではない。お店の床には変な模様<sup>もよう</sup>の魔法陣が妖しく光っていた。  
シャーッと威嚇<sup>いかく</sup>をしながら飛び掛かるくろすけ。しかし、子猿はぴょんと跳ねてくろすけの攻撃  
をかわしてしまう。

「ウキキッ、ウキキッ♪」

あろうことかこつちに向かつて、お尻ペンペンをしている。

そして、子猿は側に落ちていた巾着<sup>きんちやく</sup>を拾って魔法陣の中へと飛び込む。  
すると子猿ごと魔法陣が消えてしまった。

## 8話 僕のスキル

「今のウザい猿、何!？」

僕は思わずそう叫ぶ。大丈夫、お父さんは変な耳栓のおかげで音は全く聞こえてないから、起きちゃうことはない。

「ぐるにや……」

『あやつは使い魔の一種じゃろう。恐らくあやつをここに送り込んだ召喚士しょうかんしが外にいたはずじゃが、もう、逃げられておるじゃろうな』

くろすけはそう言ってぺちゃんと床に伏せた。

「使い魔……召喚士……」

何そのファンタジーなワード。急に起こされて急に色んなことが一度に起こって、僕の頭はショート寸前だった。

『ノエルよ、すまん。混乱しておるじゃろうな。ひとまずあのクソ猿がやったことを確認するとしてよう。一緒に納品用木箱の中のアイテムを数えてはくれんか』

「納品用の木箱？ まさか……!」

僕は慌ててくろすけと一緒に納品用の木箱のフタを開け、一番上に並べられていた回復薬の数を数えた。

「七十八……七十九……八十。八十一……あれ、もうこっからは別のアイテムになってる! うそ、

回復薬が八十一個しかない!」

僕は頬を両手で挟んで、ガガーンと絶望した。

『ふむ、十九個減っておるな……』

「あの猿の持ってた袋、あの中にパパの作った回復薬が入ってたってこと!? 泥棒!？」どろぼう

『そう考えて間違いなさそうじゃな。くつ、こんな姿でなければ、あんなクソ猿など一瞬でどうにかできたものを……』

くろすけは悔しそうに言った。

「今日の納品分が足りなかったのも、あいつのせいってことかあ……。そうだよ、パパはやる気こそないにしても、毎日ちゃんと働いているんだもん。急に生成する個数を間違えたりなんかしないよ」

『うむ、あやつは根は真面目なのじゃ。しっかりと数を確認してから木箱に入れておるはずじゃ』

「もー、誰だよ、パパにこんな意地悪をする召喚士ってやつは! くう、許せない……!」  
ダンダンと地団駄を踏み、そしてハツとする。

「そういえば、なんでくろすけってしゃべってるんだっけ?」

召喚士の件は、今はもうどうしようもないから置いておくとして、今度はくろすけの確認だ。

『違う。ワシがしゃべっておるのではない。お主が、ワシの考えを読み取っておるのじゃ』

「どゆこと……？」

『言ったじやろう。お主の中に眠っておった超能力のスキルがようやく発現したのじゃ』

「超能力って……僕の方？ くろすけじゃなくて？」

『お主の方じゃ。ワシには「鑑定眼<sup>かんていがん</sup>」というスキルがある。それでお主を見る限り、お主には間違はなく超能力のスキルがあるのじゃ』

「えーっ、くろすけのその鑑定眼？ っていうのも気になるけど、僕に超能力!? ねえ、くろすけ、僕の超能力って、どんなことができるの？」

「ぐるにゃ」

『そこまではワシにも分かん。鑑定眼はただ対象のステータスを確認するのみ。百科事典<sup>ひようかじでん</sup>ではないのじゃ。気になるのなら、ワシを使って試してみるか？』

「試すって？」

『お主がワシの考えておることを全て感じ取ることができるのか、否か、じゃ。とりあえずそこに突っ立っておれ。ワシの声を感じ取ったら返事をせい』

「分かった！」

僕はくろすけを見つめつつ、その場に立っていた。

「……」

しかし、何も聞こえてこない。

「……」

もうしばらく辛抱<sup>しんぼう</sup>して待っていると、やがてジジイ声でこう聞こえてきた。

『……ドチビおたんこナス』

「あーっ、ドチビおたんこナスって言うなあー！」

その悪口、なんか雑で嫌なんだよ……！

『ふむ。結論が出た。ワシがお主に話しかけようと思った時のみ、お主はそれを感じ取るらしい』

「そうなんだ。じゃあ、僕もやってみるよ。くろすけも聞こえたら教えて」

『いいじやろう』

つまり、僕はテレパシーができているってことだね。念話<sup>ねわ</sup>ってやつだ。頭の中でくろすけに話しかけるように……こうかな？

『……ジジイ猫』

『誰がジジイ猫じゃ！』

くろすけはすぐさま反応してシャツと威嚇した。

「おお、できる！ 僕、すぐくない!？」

僕はわーいとバンザイをして喜びを表現する。そんな僕を見てくろすけは『はあ……』と念話で

ため息をついてきた。

『全く、調子のいいやつじゃのう』

「くろすけに言われたくないんだけど」

『にゃんじやと……！ まあ、よい。今は言い争っておる場合ではない。スキルが付与される理由は様々じゃ。スキル会得のための修練しうれんを積む、死の淵ふちから逃れるために発現する、はたまた……前世の心残りからか……』

「前世の心残り……超能力……きつとそれだ、僕、信じてもらえるか分からないけど、前世の記憶を持ったまま、前世とは違う世界で生まれ直したんだ」

『異世界転生というやつじゃな。ワシは信じよう。お主がジルに連れてこられた時から、お主のステータスには超能力の項目があった。生後半年の赤ん坊が偶然スキル持ちであると言われるより、異世界転生と言われる方がしっくりくるわい』

「くろすけ、信じてくれてありがとう。前世の僕はね、病弱で、ずっと病院のベッドに寝たきりだったんだ」

『にゃんと……かわいそうにのう』

「ほら、超能力って言ったら、物を浮かせることもできそうじゃない？ だから、寝たきりでなんでもできるように、潜在的せんざいてきに超能力を欲していたのかも」

『ふむ、なるほどのう』

「つて言うか、くろすけってやっぱり人間の言葉を理解してたってことだよな？」

『うむ』

「じゃあ、僕が錬金術師になりたいこととか、パパのお店を手伝いたいと思っていることとかも理解して聞いてたってこと……？」

『うむ』

「えーっ、恥はづかずかしい！ パパには言わないでよ！」

僕は顔を赤らめてモジモジしながらそう言った。

『心配せんでも、ワシにはお主と話すことしかできん』

「あ、そっか……」

『それよりもノエルよ。錬金術師になりたいのであれば、今がその時かもしれんぞ』

「えっ、どうのこと……？」

『お主が不足分の十九個の回復薬を錬金するのじゃ』

「僕が!？」

早くやりたいと思っていた錬金術を、今、ここで僕がやるの……？僕は自分の胸がドキドキと高鳴るのを感じた。